

「地域」への愛着

— 保健師教育をとおして考える —

美船 智代 (Tomoyo MIFUNE)

鳥取看護大学 看護学部看護学科

はじめに

1970年4月、私は鳥取県に保健師（当時は保健婦）として入職しました。まだ右も左もわからないまま、先輩についていくのが精いっぱいの時、先輩から上司から常々言われたことがあります。「地域を見てきなさい」「生活を見てきなさい」と。

学生時代、確かに学んできているはずなのですが、日常業務に追われる中、どうしようと悩む日々を送っていたことを思い出します。

先輩は、何を見るべきなのかというイメージを自分なりに持っています。そのイメージに合えばいいのですが、「何のために何を見てくるのか」を明確にしておかないと何を報告すればよいのか分かりません。つまり、「何のために地域の何を見るのか」「生活の何を見るのか」を一緒に活動を推進する人たちが事前に共有しておくことが大切であることを認識しました。

ということを出しながら、保健師教育分野における「地域を捉える目を養う」とはどういうことか、どのような力を付けてほしいのか、再考してみました。学生に学んでもらいたいのは、ただ地域の社会資源を調べ、何が利用できるかを検討することではなく、「この地域で生きていく、暮らしていく」という個としての枠組みと、「この地域はどのような所なのか」という集団的な視点、その両方のまなざしを持つことと考へ「生活者の視点を養う」「質的・量的なデータを踏まえて、地域の特性（強み・弱み）を理解する」¹⁾としました。

そこで、地域への愛着に着目することの必要性に目を向けてみたいと思います。

保健師活動の今日的課題

保健師は個別支援やグループ支援など、個人の行動や特定集団を対象とした活動を得意としてきました。今後は、住民が「自分たちの地域」という感覚を持ち、地域を豊かな暮らしの資源に満ちた公共の場に変容させる知識や技術も必要です。

自分が住む地域の公共性を高めることは、岩永の健康の定義²⁾にも通じます。健康な生活とは、どのような段階にあっても自分の生きがいを持ち、自然的、社会的環境に適応しながら、自分だけでなく、周囲の人もより良い生活を送ることが出来るように、その環境に対して働きかけることが出来る生活のことです。このような生活を具現化することこそ、保健師活動の原点といえます。

地域への愛着とは

昨今、住民の地域への愛着が希薄になっている現実があります。「地域保健対策検討会報告書」³⁾では、ソーシャル・キャピタルの本質である人と人との絆や支え合いは、日本社会を古くから支える基盤であったとの補足もあります。地域への愛着は、ソーシャル・キャピタルの礎となるものと考えることが出来ます。

地域への愛着とは、「日常生活圏における他者との共有経験によって形成され、社会的状況との総合作用を通じて変化する、地域に対する支持的意識であり地域の未来を志向する心構え」と定義されています⁴⁾。地域への愛着は、きっかけさえあれば抱くことが出来る気持ちです。地域の人々と知り合い、ふれあい、交流を持つ日常生活をとおして、私たちの内面に湧き起こります。この愛着は、時とともに変化し、自分から他者、他者から自分に広がりを見せます。人は、自分の地域に愛着を持つことで周囲の人や自然、地域のことを大切にしましょう。一人一人のちょっとした気持ちの持ちようによって、人や地域は豊かになります。しかし、地域への愛着は、人間関係と結びついているために繊細であり、努力を怠ると消えてしまうという特徴も持っています。

地域への愛着という概念には、「人の繋がりを大切にする思い」「生きるための活力の源」「自分らしくいられるところ」「住民であることの誇り」という4つの意味が含まれています⁵⁾。「人との繋がりを大切にする思い」は、地域の人たちの交流をとおして暮らしの営みを分かち合えることにありがたさを感じることです。この地域の一員として周囲の人たちとのつながりを大切にする気持ちです。「生きるための活力の源」は、地域での暮らしの営みを楽しみ、そこから生きるための活力源を得る感覚です。「自分らしくいられるところ」は、地域には自分の原点や大切な思い出があり、ここに自分の居場所を見出すことです。安らぎや安堵感を得て、ほっとする感覚です。「住民であることの誇り」は、地域の住民であることに誇りを感じ、この地域をより良くしたいという願いです。この地域の人たちと共に自分たちの地域の良さを守ろうとする活動に繋がります。

おわりに

学生は、「地域社会の中で生活者としての生活経験、生活感覚に乏しく、地域社会の一員として“地域”や“生活”をとらえる視点を十分に持っていない」「生活体験が少ないうえ、地域を意識した経験がほとんどない」といった指摘がなされている⁶⁾。学生の生活経験を豊かにする可能性を教育にどう盛り込んでいけるのか検討していくことは、ますます重要になってくるのではないのでしょうか。

《注》

- 1) 大宮朋子・丸山美智子「看護学生が『地域を捉える目を養う』ための演習への提案」、『保健師ジャーナル』Vol. 73 No. 7, (2017), p. 598.
- 2) 岩永俊博「地域づくり型保健活動の考え方と進め方」『医学書院』(2003), pp. 32-33.
- 3) 岩永俊博「地域づくり型保健活動の考え方と進め方」『医学書院』(2003), pp. 32-33.
- 4) 大森純子・田口敦子・三森寧子ほか「地域への愛着を育む取り組み」『保健師ジャーナル』Vol. 73 No. 1, (2017), pp. 63-64.
- 5) 大森純子・田口敦子・三森寧子ほか「地域への愛着を育む取り組み」『保健師ジャーナル』Vol. 73 No. 1, (2017), p. 64.
- 6) 大宮朋子・丸山美智子「看護学生が『地域を捉える目を養う』ための演習への提案」『保健師ジャーナル』Vol. 73 No. 7, (2017), p. 603.